

都のはずれで出土した舶来品

平城京左京九条三坊十一・十二坪 奈良市東九条町

調査の概要 調査地は、奈良時代の平城京条坊復元では左京九条三坊十一・十二坪にあたります。これらの坪の南北方向の中軸上には、東堀河ひがしほりかわという運河が掘削されていたことが周辺の調査などから明らかになっています。

調査の結果、以下のことがわかりました。

① 十一・十二坪の間の東西道路である九条条間南小路を確認しました。道の両端に掘られている側溝の中心間の距離は約7.1mあります。

② 十一坪と十四坪の間の南北道路の東三坊坊間東小路を確認しました。正確な道幅は分かりませんが、九条条間南小路と同規模だとおもわれます。

③ 九条条間南小路と東三坊坊間路東小路の交差点を確認しました。東西道路の側溝が南北道路を横切っていることから、主要な排水は東西道路の側溝に流され、東堀河に集められたのでしょう。これらの溝から水辺のお祭りどぼに使われた土馬じんめんぼくしよどき、人面墨書土器、ミニチュア土器が出土しました。

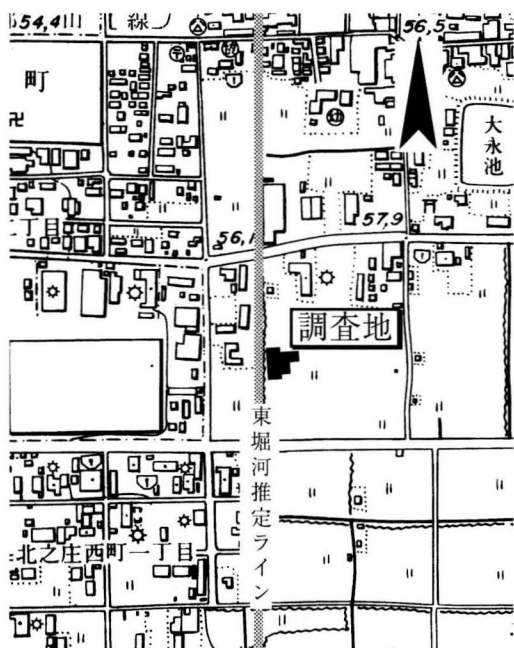
④ 十一坪では、内側に道路側溝に沿った溝が掘られています。この溝は、位置的には間に築地ついでがあった可能性があり、雨落溝と考えられます。調

査範囲内では建物の跡はありませんでした。

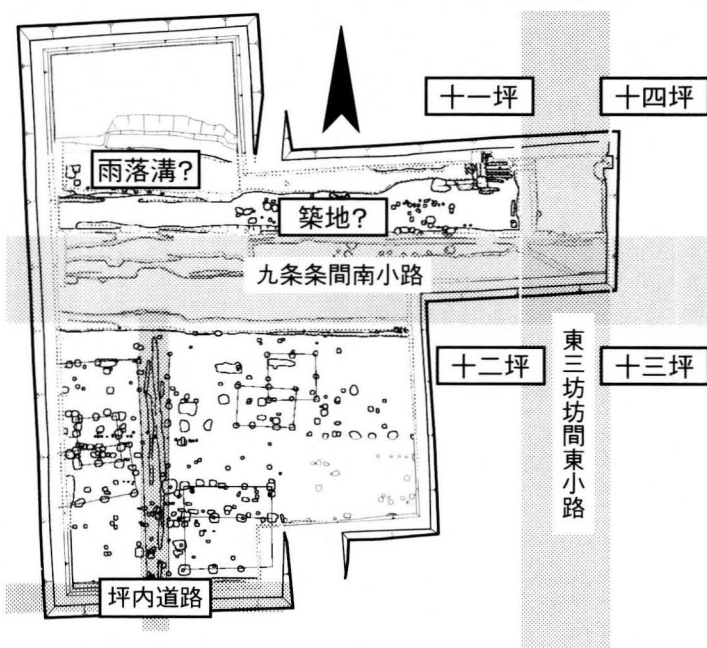
⑤ 十二坪では、ひとつの坪を1/24に分割している小規模な宅地を確認しています。柱穴と思われる穴が多数みつっていますが、そのうち建物としてまとまるのは5棟分です。南端で検出したものは庇ひさしがつく大きめのものでしたが、他は建物面積が20㎡に満たない小規模なものです。

この地は都の中心である平城宮からも遠くはなれ、周辺の調査でも今回の十二坪で確認されたような細分化された宅地と小規模な建物がみつかり、あまり身分の高い人々の居住域ではなかったようです。

今回の調査では九条条間南小路の側溝から新羅しらぎ土器という朝鮮半島からもたらされた土器が出土しました。なぜこのような場所で珍しい舶来の土器が出土したのでしょうか。新羅土器は十一坪側の側溝から出土していますが、この坪は築地が巡る可能性があり、坪の縁辺部で建物がないなど、遺構のありかたが周辺の様子とは少し違っているようで、特別な使われ方をしていたのかもしれませんが。



調査位置図 1/10,000



発掘区遺構平面図 1/600

新羅土器について 平城京の発掘調査で最も多く出土する遺物は土器です。その中に、まれに海外からもたらされたものがみられます。ここでは、近年、平城京跡の発掘調査で出土した統一新羅（676～935）からもたらされた土器について紹介したいと思います。新羅土器の特徴のひとつは、土器の表面に文様が施されていることで、「印花文土器」ともよべれます。この印花文土器は6世紀後半から9世紀前葉までつくられていた土器で、粘土で土器の形をつくり、土器の表面が軟らかいうちに数種類のスタンプ原体を押し付けて施文し、乾燥させた後に焼成された土器です。

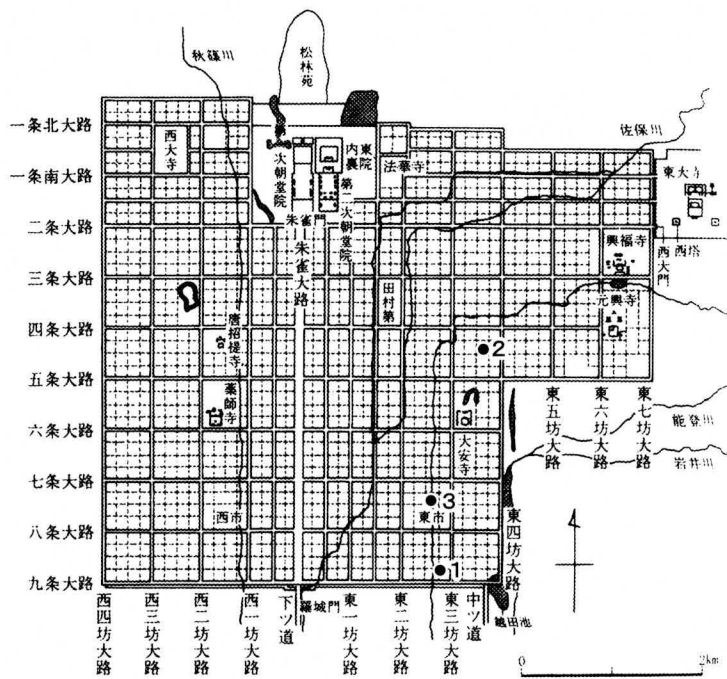
平城京出土の新羅土器 1は左京九条三坊九条条間南小路の北側溝から出土したものです。壺の体部から底部にかけての破片で、上部の文様はU字のような形を縦に連続させた文様です。下段の文様は多花弁文もしくは列点円文とよばれる文様だと思われませんが、文様の形がかなりくずれてきています。このことから、新羅土器としては比較的時期の新しい8世紀後半から9世紀前葉の土器ではないかと思われま

す。2は平城京左京五条四坊十坪の四坊坊間路東側溝から出土したもので、壺の肩部であろうと思われま

す。続文等の文様がみられます。

3は参考資料としてあげました。左京八条三坊の東市跡推定地の東堀河から出土した土器です。外面全体に灰緑色の自然釉がかかり、2条1組みの凹線によって文様帯をわけ、上段は直線文と円弧文、中段には三角形を組み合わせた文様が施されています。下段にも文様があるようですが残りが悪く、よく分かりません。体部には方形の把手が付けられています

が、1対か2対かはわかりません。この土器については日本産の土器にはみられない文様等があり、海外からもたらされた土器である可能性が高いと思われま



新羅土器出土地点

